

■ 研究ノート

## 家族の健康問題に対する周囲への開示抵抗感についての検討 — 問題の深刻さと被開示者との関係性に着目して —

加田 桜子\*

### 【要旨】

本研究の目的は家族の健康問題に対する開示の深さと開示抵抗感が、問題の深刻さと被開示者との関係性（親密性）によって差があるのかを検討することである。大学生・大学院生 96 名を軽度群 45 名、重度群 51 名に分け、場面想定法による質問紙調査を実施した。問題の深刻さを参加者間要因、開示相手を参加者内要因とする二要因の混合分散分析を行った結果、以下のことがわかった。(1) 問題の深刻さに限らず、家族は知人や親友よりも深く問題が開示されやすい。(2) 開示抵抗感は、軽度よりも重度の方が強く抱きやすく、被開示者が知人の場合は親友や家族に比べてより強く抵抗感を感じやすい。また、知人・親友・家族に開示しない理由についての自由記述を KJ 法による分類を行った。グループ編成の結果、開示しない理由は、(a) 家族の健康問題がうちの中でのみ共有される、(b) ナカマウチに対する遠慮、(c) ソトへの線引きという 3 つのグループに分類された。

キーワード：自己開示、開示抵抗感、うちとソト

### I. 問題

近年、地域コミュニティにおける助け合いに注目が集まっている。その背景には「貧困」や「無縁社会」の問題、そして東日本大震災以降「つながり」や「絆」への関心の高まりがある（松宮、2021）。「無縁社会」の言葉を一躍世間に広めた NHK「無縁社会プロジェクト」取材班（2010）によると、「自分のことで誰かに迷惑をかけたくない」の思いから困っていても誰にも頼らない「ひとりぼっち」の人たちがいる。このような血縁関係や地縁関係の希薄化や孤立の問題が進む中で、いかに助け合い、共生していくかが今日の地域コミュニティにおける喫緊の課題である。

孤立・孤独・無縁の問題は、個人だけでなく家族においても見られる。特に子育てや介護といったケアの場で、困っていながらも周囲から十分な支援を得られず、問題の長期化、深刻化するケースがある。そうしたケースには虐待や自死・自他殺に至った場合も含まれる。孤立・孤独・無縁に至る理由の一つに「家族についての語りづらさ」が関係していると考えられる。たとえば中根（1967）は「日本では嫁姑の問題は『家』の中のみで解決されなければならない、いびられた嫁は自分の親兄弟、親類、近隣の人々から援助を受けることなく、孤軍奮闘しなければならない（中根、1967, pp. 38-39）」と述べている。すなわち家庭内の揉め事は、近所の人間には知られてはならない秘密であり、その露見は「恥ずかしいこと」である（正村、1995）。家庭問題すなわち「イエの問題」は、プライベートな事

\* 立命館大学大学院 人間科学研究科博士課程後期課程

柄であり、ソトで話すことが憚られる。

家庭問題を周囲の人たちに話せないことが、その家庭および困難を抱える当人を孤立・孤独・無縁へと追い込んでしまっている。そうした家庭は、問題が家の外で語られず、外から支援を得られない状態である。もちろん、プライベートな事柄をすべて公にしなければならないわけではない。援助ニーズを抱えていながら、それを開示できない（そう感じる）ことが問題なのである。本研究は、家庭問題に対する周囲への「話しづらさ」に注目し、社会心理学の立場からその要因について検討する。問題を打ち明けることは、心理学の立場では「自己開示」や「援助要請・相談行動」、「カウンセリング」など様々な用語で表現され、研究がなされてきた。本研究ではカウンセリング等の臨床場面ではなく、日常生活場面における家庭問題の開示およびその抵抗感に注目する。

### 1.1 「誰」に対して「どのような話題」を開示するのか

自己開示 (self-disclosure) とは、「特定の他者に対して、言語を介して意図的に伝達される自分自身に関する情報、およびその伝達行為 (安藤, 1986)」を指す。自分自身に関する情報とは、「自分の性格や身体的特徴、考えていること、感じていること、経験や境遇など、自己の性質や状態をあらゆる事柄 (榎本, 1997, p. iv)」であり、自身の家族のことも含まれる。たとえば ESDQ-45 (榎本, 1997) における「血縁的自己」は、自己開示で語られる自己の 15 側面のうちの一つであり、「親に対する不満や要望、家族についての心配事に関すること」を指す。よって本研究で取り上げる家庭問題も開示される自己の一側面に含まれる。

自己開示研究では「自分についてどのくらい他者に話すか」を問題とし (榎本, 1997)、その主題は自己開示に影響を与える状況要因を明らかにすることである。自己開示に影響を与える主な要因は、開示する話題や開示者の自尊心やパーソナリティなどの個人的要因、室温や周囲の状況など状況要因、開示者と被開示者との関係性がある。本研究の目的から、開示する内容と被開示者との関係性に関する先行研究を概観していく。

これまでの研究から、被開示者との関係性すなわち親密性が自己開示に影響を与えることがわかっている (Chaikin & Derlega, 1974a, 1974b; Derlega & Chaikin, 1976; 片山, 1996; 丹波・丸野, 2010)。たとえば顔見知り程度の友人や知人と比較して、親しい友人への自己開示の程度は高く (Derlega & Chaikin, 1976)、親密性の低さは問題の深刻さや自尊心の高低を問わずに自己開示の抑制要因である (片山, 1996)。また、友人に対しては深い自己開示が好まれる一方で、見知らぬ人に対する深い自己開示は好ましくないとされる (Chaikin & Derlega, 1974a, 1974b)。さらに、誰に開示するかによって自己開示の動機も異なる。被開示者が友人の場合は自己開示の動機が「情動開放」であるのに対し、親しい友人の場合では「情動開放」に加えて「理解・共感」を動機とする自己開示が多かった (榎本, 1997)。つまり、われわれはより親しい相手に対しては深い自己開示をし、その内容に対して理解や共感を求める傾向にある。

しかし、親しいからこそ話せない事柄も存在する。たとえばヤングケアラーの当事者は、親をケアする経験について友人に打ち明けることはためらわれたと語っている (森田, 2010)。これは開示内容がその個人にとって個人的かつ内面的であると感じている事柄ほど、

それを表出する際に強い話しにくさ（抵抗感）を伴うためである（遠藤，1995）。自己開示の深さの見解（Altman & Taylor, 1973）に、「自分の弱点に触れる内容（vulnerability）」や「社会的に望まない側面（socially undesirable）」がある。また榎本（1997）は、自己開示の心理的抑制要因を3つ挙げている。第1に「現在の関係のバランスを崩すことへの不安」、第2に「深い相互理解に対する否定的感情」、そして第3に「相手の反応に対する不安」である（榎本，1997）。開示に抵抗感を抱くのは自身の個人的かつ内面的な事柄の中でも、自身の弱点や、否定的あるいは社会的に望ましくない内容であり、相手との今後の関係に対しての懸念が増幅するからである。ゆえに開示に抵抗感を伴う事柄については、一般的には「秘密」や「プライベート」な事柄、「プライバシー」として伏せられている。先行研究では、そうした自己開示に伴う抵抗感を「開示抵抗感」と表している。

## 1.2 他者との関係において抱く開示抵抗感

開示抵抗感は多次元構造であり、大きくわけて〈開示内容への評価に関わる抵抗感〉と〈相互作用変化に係わる抵抗感〉の2次元にまとめられる（遠藤，1995）。それぞれ開示抵抗感の対自的要因と対他的要因とされる（遠藤，1995；片山，1996）。「対自的抵抗感」とは、否定的内容の自己開示を行った自身の内面に注意や意識が向けられ、自己評価の低下に対する抵抗感である（遠藤，1995；片山，1996；松下，2005）。対自的抵抗感は私的自己意識の高い者ほど強く感じる事が指摘されている（遠藤，1995）。すなわち自己の内面の傷つき，“直面化傷つき”に関連している（遠藤・湯川，2013；片山，1996）。

他方の「対他的抵抗感」とは、否定的な自己開示によって他者からの評価が低下することへの不安や、これまで築き上げてきた相互に親密な関係に悪影響が及ぶことを懸念して生じる（遠藤・湯川，2013；片山，1996）。対他的抵抗感は公的自己意識の高さと関連し、特に他者からの評価に対する意識との関連が認められている（遠藤，1995）。

開示抵抗感と自尊心との関連性を比較した片山（1996）は、自尊心の高い者は親しい友人よりも知人に対する開示抵抗感が高く、対自的よりも対他的理由から自己開示を抑制しやすいことを示した。自尊心の低い者は自己の傷つきを回避するために自己開示を抑制しやすく、その程度は自己開示の内容が否定的であるほど強いことがわかった（片山，1996）。また遠藤・湯川（2010）は、被開示者から拒絶的な反応が返された場合、怒りと抑うつが高まり、対自的・対他的抵抗感が強まることを指摘している。被開示者からの拒絶は、自信の低下に加え、対人評価懸念が高まることがわかっている（川西，2008）。

これらの先行研究から、開示抵抗感を抱く背景には自尊心などの個人特性や、過去の自己開示の経験が影響を与えると考えられる。また被開示者からの拒絶的な反応は、開示者の対人評価懸念といった対人的側面だけでなく、自信低下や怒り・抑うつの高まりなど個人内の変化をもたらしていた。しかし先行研究では主に「自分自身に対する否定的内容」に対する開示抵抗感を測定しており、開示内容を「自身の家族」とした研究は少ない。榎本（1997）は、血縁的自己の開示が被開示者との関係性に限らず難易度が高いことを示したが、家族の話題についての具体的な内容は提示していない。したがって本研究では、「自身の家族」に関する具体的な内容について、被開示者との関係性の中で開示抵抗感がどのように異なるのかを検討する。

## II. 目的

本研究の目的は2つある。第1の目的は、家庭問題がどの程度、周囲の人間に開示されるのかを検討することである。ここでは周囲の人間を「普段顔を合わせる間柄の人間」と定義し、顔見知りの友人（以下、知人とする）、親しい友人（以下、親友とする）に対する開示の程度と、家族に対する開示の程度との差を検討する。

第2の目的は、問題の深刻さの違いによって開示への抵抗感に違いがあるのかを検討することである。本研究では家庭問題の1つとして健康問題を取り扱う。家族の健康面の変化は個人だけでなく家族単位で経験するライフイベントの1つであり、ストレス反応や、メンタルヘルスを考える上で大きな影響をもつ。また家族の健康問題は、開示者自身の内面への傷つきよりも、周囲との今後の関係性に対する懸念を生じさせると考えられる。とくに親友に対しては、その懸念がより強く生じると考えられる。

したがって仮説は以下の通りである。

仮説1：家族の健康問題が重度な場合、軽度の場合に比べ、知人や親友よりも家族に対する自己開示の程度が深い。

仮説2：家族の健康問題が重度な場合は、軽度の場合に比べ、親友よりも知人に対する開示抵抗感が高く、家族よりも親友に対する開示抵抗感が強い（知人>親友>家族）。

仮説3：家族の健康問題が深刻な場合、軽度の場合に比べ、親しい友人に対しての対他的抵抗感を知人や家族よりも高く、知人に対する対他抵抗感も家族よりも高い（親友>知人>家族）。

仮説4：家族に対する開示抵抗感はずねに知人や親友に比べて低い。

## III. 方法

### III. 1 調査協力者

本調査は、立命館大学に所属する大学生・大学院生98名に実施した。回答に不備があった2名を除き、96名（男性19名、女性77名）を分析対象とした。調査協力者の平均年齢は、20.07（ $SD = 0.98$ ）歳であった。

### III. 2 実施期間

本調査は2023年9月下旬－10月上旬に行った。

### III. 3 シナリオ

本調査で使用したシナリオは、家族の健康問題が軽度の場合と重度の場合の2種類用意をした。軽度群では季節の変わり目で体調不良を訴える内容、重度群では食欲不振や気分の落ち込みからうつ病が疑われる内容であった（表1と表2）。

調査協力者には、家族構成員1名のイニシャルを回答させた。その後、シナリオの〇〇の箇所にイニシャルを回答させた家族を思い浮かべてもらいながら、軽度と重度のいずれ

か一方のシナリオを読ませた。本研究では、対象者の45名が軽度群に、51名が重度群に割り振られた。

### Ⅲ. 4 調査項目

調査協力者には軽度群、重度群ともに同じ項目について尋ねた。

**デモグラフィック変数** 性別、年齢、家族構成（人数）を尋ねた。

**自己開示の程度** 榎本（1997）を参考に、シナリオの内容が実際に起こった場合、どの程度開示したいかを尋ねた。知人、親友、家族に対して「全く話したくない（1点）」から「非常に話したい（6点）」の6件法で回答を求めた。

**開示しない理由** 自己開示の程度に関する質問で、「全く話したくない（1点）」、「話したくない（2点）」、「あまり話したくない（3点）」と回答した者のみに、その理由を自由記述で尋ねた。

**開示抵抗感** 家族の健康問題への開示抵抗感を測るため、開示抵抗感尺度（松下，2005）を使用した。開示抵抗感尺度は「直面化傷つき」、「他者懸念評価」、「ネガティブな自己評価」、「伝達困難性」の4因子構造15項目から成る尺度である。「直面化傷つき」と「ネガティブな自己評価」は対自的抵抗感、「他者評価懸念」と「伝達困難性」は対他的抵抗感と仮定されている。全15項目を知人、親友、家族それぞれに対して、「全くそう思わない（1点）」から「とてもそう思う（4点）」の4件法で回答を求めた。

### Ⅲ. 5 手続き

調査協力者にはまずデモグラフィック変数と家族一人のイニシャルを回答させた。その後、シナリオを読ませ、各質問項目に回答させた。なお、本調査は調査協力者には個別または授業内での集団形式によって行われ、Google Formを用いて回答を求めた。

### Ⅲ. 6 倫理的配慮

調査を始める前に調査協力者には、研究で得られたデータは研究目的以外に用いられることはないこと、研究協力者が体調不良や不快感をおぼえた場合は速やかに研究を中断することを説明した。本研究への参加は任意であり、回答後あるいは回答の途中であっても辞退が可能であること、その場合に調査協力者が不利益を被ることは一切ないと伝えた。また、研究協力者個人の具体的な悩みを尋ねる項目はないと説明した。

### Ⅲ. 7 分析方法

問題の深刻さ（軽度・重度）と開示相手（知人・親友・家族）を要因とする2×3の分散分析を行った。なお、問題の深刻さは参加者間要因であり、開示相手は参加者内要因であった。分析には統計分析ソフトIBM SPSS Statistics ver. 29.0.0.0を用いた。開示したくない理由に関する自由記述は、KJ法によるグループ編成と図解化を行った。



表 1. 軽度群で提示したシナリオ

家族についてのちょっとした心配事

〇〇の様子が最近気になる。少し体がだるそうで、今日も朝家を出る前に頭痛を訴えていた。季節の変わり目で朝晩の寒暖差が原因かもしれない。明日明後日も気温差があるみたいで少し心配だ。こういうときに何か良い対処法はないだろうか。(110字)

表 2. 重度群で提示したシナリオ

家族のやや深刻な心配事

〇〇の様子が最近気になる。表情が暗いし、ずっと落ち込んでいるみたい。食欲もなくて前より痩せたように見える。〇〇の様子から、うつ病なんじゃないかなと思う。今日一日、しんどそうな〇〇のことがずっと頭の中にある。どうしたらいいだろう。(114字)

#### IV. 結果

調査協力者の家族構成を図示したものが図 1 である。4 人家族が 53 名と最も多く、全体の 55.2% を占めた。次いで 5 人家族が 24 名 (25.0%)、3 人家族が 11 名 (11.5%) であった。家族の構成人数が 6 人以上の者もあり、6 人家族が 3 名 (3.1%)、7 人家族と 8 人家族がそれぞれ 2 名 (2.1%)、そして 9 人家族が 1 名 (1.0%) であった。よって、調査協力者の全員が、問題を抱える本人以外の家族成員と家庭問題について話す環境にあった。

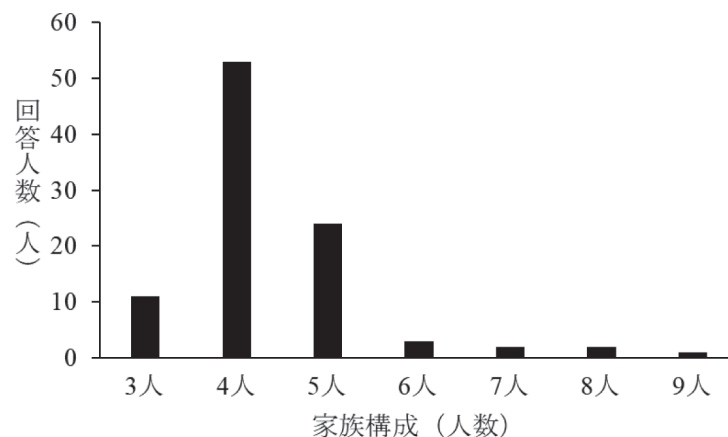


図 1. 家族構成の分布

#### IV. 1 問題の深刻さと被開示者との関係性による開示の深さ、開示抵抗感について

問題の深刻さ (軽度・重度) と被開示者との関係性 (知人・親友・家族) 別に、開示の深さと開示抵抗感、対他的抵抗感の平均値を算出した (表 3)。各得点を従属変数とし、問

題の深刻さを参加者間要因，被開示者との関係性を参加者内要因とする二要因混合分散分析を行った。

その結果，問題の深刻さの主効果は開示抵抗感 ( $F(1, 94) = 10.01, p < .01$ ) と対他的抵抗感 ( $F(1, 94) = 9.35, p < .01$ ) において有意であった。すなわち家族の健康問題が重度の場合，対象者の開示抵抗感と対他的抵抗感の程度が高かった。また関係性の主効果は，開示の深さ ( $F(2, 93) = 52.70, p < .001$ )，開示抵抗感 ( $F(2, 93) = 33.40, p < .001$ )，対他的抵抗感 ( $F(2, 93) = 28.64, p < .001$ ) のすべてにおいて有意であった。問題の深刻さと被開示者との関係性の交互作用は，開示の深さ ( $F(2, 93) = 0.60, n.s.$ )，開示抵抗感 ( $F(2, 93) = 0.65, n.s.$ )，対他的抵抗感 ( $F(2, 93) = 1.84, n.s.$ ) において有意ではなかった。

開示の深さ，開示抵抗感，対他的抵抗感に対する関係性の主効果について，Bonferroni法による多重比較を行った。その結果，開示の深さでは，家族は知人，親友に比べてより深く開示されやすく，親友は知人に比べてより深く開示されやすかった (いずれも  $p < .01$ )。開示抵抗感では，知人は親友，家族に比べてより強く抵抗感を感じやすかった (いずれも  $p < .01$ )。さらに対他的抵抗感では，知人は親友，家族に比べてより強く抵抗感を感じ，親友は家族に比べてより強く抵抗感を感じやすかった (いずれも  $p < .01$ )。

表 3. 開示の深さ，開示抵抗感を従属変数とする二要因混合分散分析の結果

問題の程度 被開示者	軽度						重度					
	知人		親友		家族		知人		親友		家族	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
開示の深さ	3.07	1.14	4.02	1.12	4.73	0.96	2.92	1.48	4.16	1.21	4.88	1.11
開示抵抗感	25.04	7.06	21.47	5.99	20.33	5.55	29.63	7.32	25.12	6.93	23.24	7.34
対他的開示抵抗感	6.29	2.37	5.18	1.70	4.82	1.53	7.80	2.43	6.27	2.23	5.29	2.14

N=96

#### IV. 2 開示しない理由についての自由記述の分析

シナリオで提示した家族の健康問題を，知人・親友・家族に開示したくない理由（自由記述）について，KJ法 AB型（川喜田，1967）によるグループ編成，図解化を行った。

グループ編成の結果，まず 20 の小グループが編成された。次に類似性や関係がありそうな小グループから，6 の中グループが編成された。最終的に 3 つの大グループに分類され，どのグループにも属さない記述が 2 例であった（表 6）。各グループの関係性を図解化したものが図 2 である。なお，小グループは『』，中グループは〈〉，大グループは【】で示す。

【うちの中での共有】は，2 つの中グループ〈家の中の話題〉と〈うちにおける秘密〉と 1 つの記述例から成る。中グループ〈家の中の話題〉は『身内の話』，『プライバシーの侵害』，『プライベート』，『家族の健康の話』の 4 つの小グループから編成された。また，中グループ〈うちにおける秘密〉は，『秘密』，『本人の気持ちの尊重』の 2 つの小グループから編成された。家族の健康問題を「他人に話したくない」という抵抗的な姿勢や，「家族本人の言いふらされたくないのでは」という気持ちを慮る態度が読み取れた。よって，家族やプライバシーなど身内への意識から，家庭内の話題をソトに口外したくないという特徴が見られた。

【ナカマウチへの遠慮】は、中グループ〈話題性の考慮〉と小グループ『相手への気遣い』から成る。中グループ〈話題性の考慮〉は、5の小グループ『重い話題』、『マイナスな話題』、『話題への規範意識』、『気が引ける』、『盛り上がり欠ける』と1つの記述例から編成された。小グループ『相手への気遣い』は、家族の健康問題を話すことで、「相手が反応に困ったり」、「余計な心配」や「負担」になることを考慮する記述から編成された。

【ソトへの線引き】は、2つの中グループ〈関係のない話題〉と〈警戒心〉から成る。〈関係のない話題〉は、『無関心』、『必要性のなさ』の2つ小グループから編成された。〈警戒心〉は、小グループ『信頼のなさ』と「広められるかもしれない」という1つの記述例から編成されている。

〈メリットの不在〉は4つの小グループ『開示後の心配』、『期待のなさ』、『有益性のなさ』、『理解のなさ』から編成された。

表 4. 家族の健康問題を話さない理由から生成されたカテゴリー

大グループ	中グループ	小グループ	記述例	
【ウチの中での共有】	〈家の中の話題〉	『身内の話』	身内の話、家庭内のことだから、家族のこと、家族の話、家族の個人的な出来事	
		『プライバシーの侵害』	個人情報、家族のプライバシーに関すること、家族のプライバシーの侵害、家族の問題を勝手に他人に共有、勝手に他人に話をするのはよくない	
		『プライベート』	プライベートすぎ、プライベートな話題、プライベートな問題	
	〈ウチにおける秘密〉	『家族の健康の話』	家族の体調の話、体調に関する話、家族の健康状態	
		『秘密』	家族以外の人に話したくない、秘密にしたい、他人に教えたくない、家族の話をしたくない、あまり口外したくない	
		『本人の気持ちの尊重』	個人の問題でもあるから、自力でどうにかするべきものだと考えるだろうから、家族本人も言いふらされたくはないのではないか	
			ステーキホルダー	
	【ナカマウチへの遠慮】	〈話題性の考慮〉	『重い話題』	重い話題だと感じる、内容がセンシティブ、具体的すぎ
			『マイナスな話題』	家族のマイナスな話題、ネガティブなことは言うべきではない
			『話題への規範意識』	すすんで話すような内容ではない、あまり知らない人に話す内容ではない、知人に話すような内容ではない、相談するような内容ではない
『気が引ける』			話しづらい、苦手、気が引ける、恥ずかしい	
『盛り上がり欠ける』			盛り上がらない、面白くない話、会話の話題にするほどのことなのか、話題性がない	
			踏み込みすぎた話、踏み込みすぎたくない	
【ソトに対する線引き】	〈関係のない話題〉	『相手への気遣い』	相手を困らせる、相手が反応に困るだけ、余計な心配をかける、悲しくなりそう、困惑するだろう、相手が返事にこまる、相手の気分を害すと思う、負担をかけてしまいそう、余計な感情をもたせたくない、他人に気を遣わせてしまいそう	
		『無関心』	他人には関係のないこと、どうでもいい情報、相手は特に何も思わないだろうから	
		『必要性のなさ』	話す必要がない、わざわざ話すことではない、話を大きくする必要もない	
	〈警戒心〉	『信頼のなさ』	親しくない、信頼して話せない、関係性があまり良くない、信頼がおけるか確信がもてない	
			広められるかもしれない	
			『開示後の心配』	気まづくなりそうで億劫、本当に問題なことであると実感してしまう
〈メリットの不在〉		『無駄と感じる』	めんどくさくなる、時間の無駄	
		『期待のなさ』	有用なアドバイスを得られる可能性は薄い、話しても意味がない、話しても解決できない、いい答えが返ってこなさそう	
		『理解のなさ』	理解がない、理解してもらえないとは限らない、相手はわからないだろう	
			心配されると不安になる	
			相談とかをするタイプではない、家族思いのキャラを表立って出しているわけではない	
			医者相談するべき	



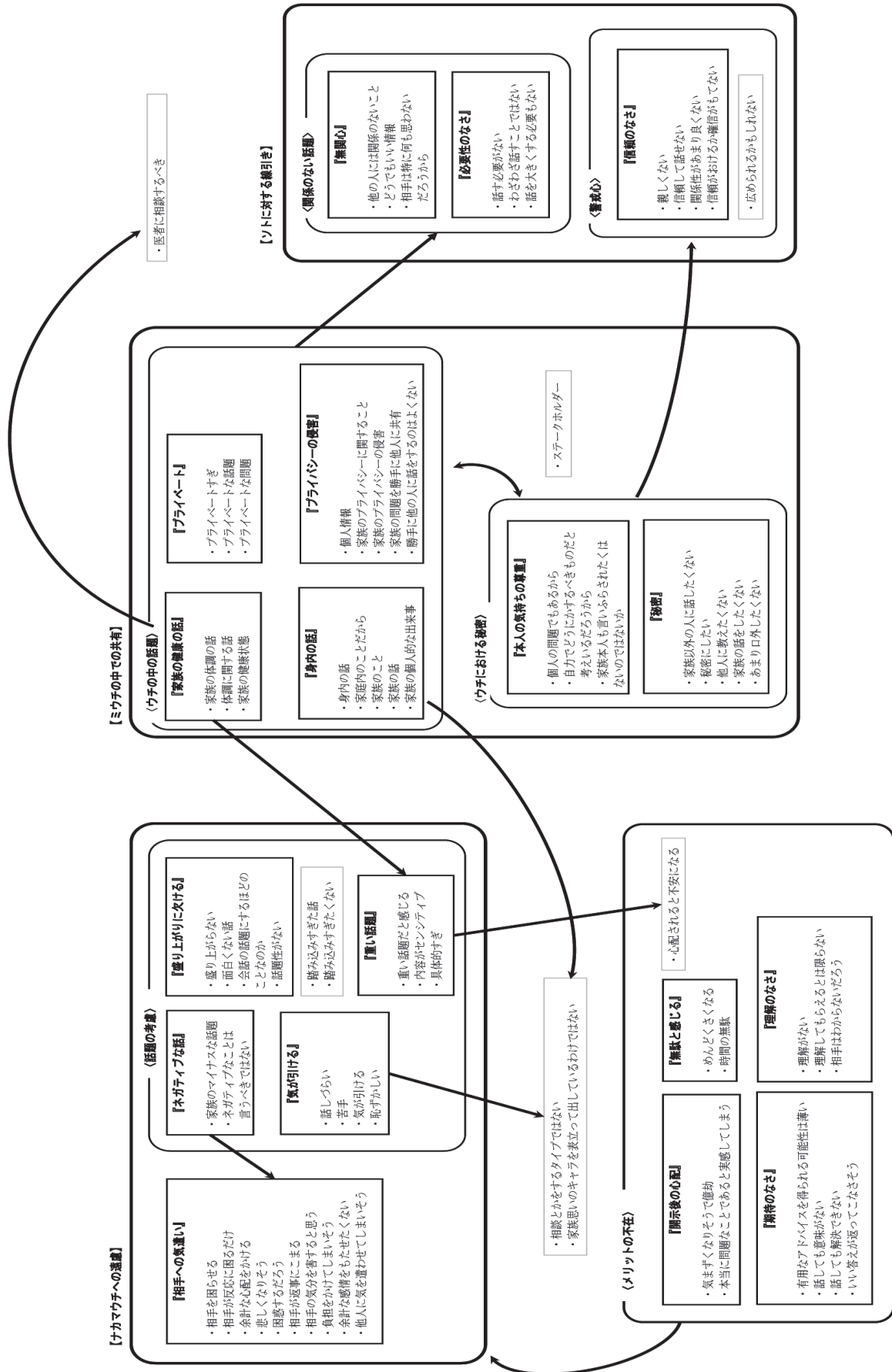


図2. 開示したくない理由についての関係図

## V. 考察

本研究の目的は、家族の健康問題が周囲の人間に開示されるのか、開示抵抗感をどの程度抱くのかを検討することであった。この目的について、以下4つの仮説を立てた。家族の健康問題が重度な場合、軽度の場合に比べ、知人や親友よりも家族に対する自己開示の程度が深い（仮説1）。家族の健康問題が重度な場合は、軽度の場合に比べ、親友よりも知人に対する開示抵抗感が高く、家族よりも親友に対する開示抵抗感が強い（仮説2）。家族の健康問題が深刻な場合、軽度の場合に比べ、親しい友人に対しての対他的抵抗感を知人や家よりも高く、知人に対する対他抵抗感は家族よりも高い（仮説3）。家族に対する開示抵抗感はずねに知人や親友に比べて低い（仮説4）。

これら4つの仮説を検証するため、健康問題の程度と被開示者との関係性を要因とする二要因混合分散分析を行い、開示しない理由についてKJ法による分類を行った。以下、得られた結果をもとに「家族の健康問題を周囲に開示すること／しないこと」、「家族の健康問題の開示に対する障壁」について考察する。

### V. 1 親密性が家庭問題の開示に及ぼす影響

分散分析の結果、被開示者との関係性の主効果が有意であった。家族は知人、親友に比べてより深く開示されやすく、親友は知人に比べてより深く開示されやすかった。一方で、問題の深刻さの主効果は有意ではなかった。このことから問題の深刻さに限らず、家族は知人や親友よりも深く問題が開示されやすいことがわかった。よって仮説1は一部分支持された。次に問題の深刻さの主効果、関係性の主効果はそれぞれ開示抵抗感に対して有意であった。重度は軽度よりも、そして知人は親友、家族に比べてより強く抵抗感を感じやすかった。しかし親友と家族の間に開示抵抗感の差は確認されなかった。よって仮説2はおおむね支持された。問題の深刻さと関係性の主効果は、それぞれ対他的抵抗感に対して有意であった。重度は軽度よりも、そして知人は親友、家族に比べてより強く抵抗感を感じ、親友は家族に比べてより強く対他的抵抗感を感じやすかった。このことから、仮説3はその一部が、仮説4は全面的に支持された。

以上の結果から家族の健康問題は、自身の家族には深刻さにかかわらず開示しやすいのに対して、知人や親友に対しては深刻であるほど開示抵抗感を抱きやすいことがわかった。また、親密性の低い知人ほど、より抵抗感を抱きやすかった。すなわち、開示抵抗感の問題の深刻さや、相手（被開示者）との親密性の低さを理由に抱きやすいと考えられる。開示抵抗感と被開示者との関係性は、片山（1996）と一致する結果であった。さらに開示の深さは、問題の深刻さではなく相手（被開示者）との親密性の深さに伴うことがわかった。自己開示の深さと親密性の関係は指摘されており（Chaikin & Derlega, 1974a, 1974b; Derlega & Chaikin, 1976; 片山, 1996; 丹波・丸野, 2010）、本研究においても同様の結果が得られた。したがって、自分自身に関するだけでなく家族の話題であっても、相手との親密性が開示において重要な要因であることが明らかになった。

**今後の関係への懸念** 対他的抵抗感は相互に親密な関係に悪影響が及ぶことを懸念して生じる（遠藤・湯川, 2013; 片山, 1996）。ゆえに本研究では、すでに親しい関係を築いて

きた親友に対する対他的抵抗感が、知人よりも高いと仮説を立てた。しかし本研究の結果、知人への対他的抵抗感のほうが親友よりも高いことがわかった。見知らぬ人に対する深い自己開示は好ましくない (Chaikin & Derlega, 1974a, 1974b) という規範や、親密性の低さによる自己開示の抑制 (片山, 1991, 1996) が影響したと考えられる。さらに知人とは今後親しくなる可能性や、親しくならずとも知人として付き合いが続く可能性を考慮にいったとも考えられる。すなわち「親密化の考慮」や「関係流動性の低さ」が影響した可能性がある。

## V. 2 「ウチの話題」に対する遠慮と警戒心

自由記述の KJ 法による分類から、家族の健康問題は「ナカマウチへの遠慮」や「ソトに対する線引き」がされ、「ウチの中での共有」にとどまっていると考えられた。なぜなら家族の健康問題が「プライベートの話題」かつ「重い話題」であるため、「相手の反応」や「負担」を気にしていた。また健康問題について口外することは「プライバシーの侵害」でもあり、信頼のおけない相手に話すことで「広められるかもしれない」と被開示者以外の人間への漏洩を「警戒」する記述も見られた。「相手への迷惑」と「秘密の漏洩」の予期は、援助要請実行のコストである (永井・鈴木, 2018)。よって、周囲の人間に対する開示抵抗感の背景には、自分自身の評価の低下に対する懸念ではなく、「相手の迷惑」になることを避けたい気持ちや、「家や家族のことが周囲 (=ソト) に知られる」ことへの懸念が関係していると考えられる。

井上 (1977) は、ウチの集団の閉鎖性について、「自分だけがソトを見ていて、ソトからは見られまいとするアンヴァレント (両義的) な傾向がつよい」と述べている。本研究では相手への『相手への気遣い』や〈話題性の考慮〉など相手の反応を慮る一方で、言いふらされたくないといった〈警戒心〉や、「他人に教えたくない」といった『秘密』からそうした姿勢が見出された。

**ウチへの責任がなく楽しさを志向する関係性** 親友も家族も個々人にとって親密な関係であるが、本研究では両者の間で開示の深さや開示抵抗感に差が認められた。この差が生じた理由として、家族 (ウチ) に対する責任の有無が考えられる。井上 (1977) は、家族を〈責任共同体〉と表現している。本研究における大グループ【ウチの中で共有】とりわけ中グループの〈ウチの中の話題〉は、まさしく家族としての責任を反映していた。すなわちウチの中で責任を背負い合っているからこそ、責任を持たないソト (ヨソ) の人には話さない (話すべきではない) と捉えることができる。

また青年期における友人関係には、内面的な話題や真剣な議論といった深刻さを回避し、楽しさを志向する種類がある (岡田, 1993)。本研究では家族の健康問題は〈話題性に欠ける〉ため、知人や親友との会話では避けるべき話題とみなされたと考えられる。

## V. 3 本研究の課題と今後検討すべき点

最後に本研究の課題と今後の研究で検討すべき点を、3つ挙げる。1つ目は、被開示者との関係性 (親密性) の評価である。本研究では家族以外の被開示者を知人・親友とのみ提

示し、親しさを評定する手続きを行わなかった。ゆえに教示上では同じ知人・親友であっても、調査協力者それぞれで想定した相手との親しさにはばらつきがあった可能性がある。

2つ目は、「何が」家庭問題の開示を促進させるかである。本研究では、調査協力者に「開示しない」理由を尋ねたものの、「開示する」理由は扱わなかった。KJ法による分析では〈メリットの不在〉が開示しない理由の1つであるとわかった。援助要請においては「ポジティブな結果」を予期することが援助要請の実行に最も影響力を持つとされる (Li et al., 2014; 永井・鈴木, 2018)。これらから家庭問題においても同様に、開示することのメリットを予期することで、開示や援助要請が促される可能性がある。ゆえに今後の研究では、家庭問題を開示することのリスク（ウチの秘密の漏洩）と利益（ポジティブな結果）について検討すべきである。

そして3つ目は、家庭問題の内容である。本研究で扱った家庭問題は健康問題であり、重度群ではうつ病を疑われる内容を提示した。精神疾患に対するスティグマはしばしば指摘されており（たとえば吉岡・三沢, 2012）、開示抵抗感が「家族がうつ病であると告白すること」に対する抵抗なのか評価ができなかった。ゆえに今後の研究では、精神疾患だけでなく身体疾患に対する開示抵抗感や、健康問題以外の問題（経済的問題など）に対する開示抵抗感について比較・検討することが求められる。

#### [参考文献]

##### 書籍 (books)

井上忠司, 『「世間体」の構造——社会心理史への試み——』, 日本放送出版協会, 1977年  
NHK「無縁社会プロジェクト」取材班, 『無縁社会——“無縁死”三万二千人の衝撃』, 文藝春秋, 2010年

榎本博明, 『自己開示の心理学的研究』, 北大路書房, 1999年

中根千枝, 『タテ社会の人間関係』, 講談社, 1967年

正村俊之, 『秘密と恥——日本社会のコミュニケーション構造——』, 勁草書房, 1995年

松宮朝, 『かかわりの循環——コミュニティ実践の社会学——』, 晃洋書房, 2022年

Altman, I., and Taylor, D. A., *Social penetration*. Holt, Rinehart and Winston, 1973.

Derlega, V. J., Metts, S., Petronio, S., and Margulis, S. T., *Self-Disclosure*. Saga Publications, Inc., 1993. (= 齋藤勇監訳, 豊田ゆかり訳, 『人が心を開くとき・閉ざすとき——自己開示の心理学——』, 金子書房, 1999年)

##### 雑誌論文 (journal articles)

安藤清志, 「対人関係における自己開示の機能」, 『東京女子大学紀要』, 1986年, 36(2), 167-199頁

榎本博明, 「対人関係を規定する要因としての自己開示研究」, 『心理学評論』, 26(2), 1983年, 148-164頁

遠藤寛子, 湯川進太郎, 「対人的ネガティブ感情経験の開示と被開示者の反応——女子大学生を対象に——」, 『心理学研究』, 84(1), 2013年, 1-9頁

遠藤公久, 「自己開示における抵抗感の構造に関する検討」, 『筑波大学心理学研究』, (16), 1994年, 191-197頁

遠藤公久, 「自己開示における抵抗感の構造」, 『カウンセリング研究』, 28(1), 1995年,

47-57 頁

岡田努, 「現代青年の友人関係に関する考察」, 『青年心理学研究』, 5, 1993 年, 43-55 頁

片山美由紀, 「自尊心が自己のネガティブな側面の開示に及ぼす影響について」, 『日本社会心理学第 32 回大会発表論文集』, 1991 年, 226-229 頁

片山美由紀, 「否定的内容の自己開示への抵抗感と自尊心の関連」, 『心理学研究』, 67(5), 1996 年, 351-358 頁

川西千弘, 「被開示者の受容・拒絶が開示者に与える心理的影響——開示者・被開示者の親密性と開示者の自尊心を踏まえて——」, 『社会心理学研究』, 23(3), 2008 年, 221-232 頁

丹波空, 丸野俊一, 「自己開示の深さを測定する尺度の開発」, 『パーソナリティ研究』, 18(3), 2010 年, 196-209 頁

永井智, 鈴木真吾, 「大学生の援助要請意図に対する利益とコストの予期の影響」, 『教育心理学研究』, 66(2), 2018 年, 150-161 頁

松下智子, 「ネガティブな経験の意味づけ方と開示抵抗感に関する研究」, 『心理学研究』, 76(5), 2005 年, 480-485 頁

森田久美子, 「メンタルヘルス問題の親を持つ子どもの経験——不安障害の親をケアする青年のライフストーリー——」, 『立正社会福祉研究』, 12(1), 2010, 1-10 頁

吉岡久美子, 三沢良, 「精神疾患に関するスティグマの影響モデルの検証——うつ病の原因帰属と社会的距離の関連性——」, 『健康心理学研究』, 25(1), 2012 年, 93-103 頁

Chaikin, A. L., and Derlega, V. J., “Linking for the norm-breaker in self-disclosure.” *Journal of Personality*, 42(1), 1974a, pp.117-129.

Chaikin, A. L., and Derlega, V. J., “Variables affecting the appropriateness of self-disclosure.” *Journal of Consulting & Clinical psychology*, 42(4), 1974b, pp.588-593.

Derlega, V. J., and Chaikin, A. L., “Norms affecting self-disclosure in men and women.” *Journal of Consulting & Clinical psychology*, 44(3), 1976, pp.376-380.

Li, W., Dorstyn, D. S., and Denson, L. A., “Psychosocial correlates of college students’ help-seeking intention: A meta-analysis.” *Journal of Professional Psychology: Research and Practice*, 45(3), pp. 163-170.



# Hesitation in Self-Disclosure of Family Health Problems

Sakurako Kata

## Abstract:

This study examined whether the depth of disclosure and resistance to disclosure of family health problems differ by the severity of the problem and the relationship (intimacy) with the discloser. The undergraduate and postgraduate students ( $N=96$ ) were divided into two groups, 45 in the mild group and 51 in the severe group, and a questionnaire survey using the "scene-assumption" method was conducted. A two-factor mixed analysis of variance was conducted, with the severity of the problem as a between-subjects factor and the disclosure partner as a within-subjects factor. Free-text response of reasons for not disclosing about family health problems were analyzed qualitatively by making use of KJ method. The main results were as follows: (1) Disclosure to family members tended to be deeper than to acquaintances or close friends, regardless of the severity of the problem. (2) Hesitation to disclosure is more likely to be held more strongly in severe cases than in mild cases. It is more likely to occur stronger when the recipient is an acquaintance than when the recipient is a close friend or family member. (3) The reasons for not disclosing were categorised into three groups: (a) family health problems are shared only within the uchi, (b) reservation to the nakama-uchi, and (c) setting boundaries to soto.

Keywords: Disclosure, Hesitation in Self-Disclosure, uchi-soto